

大地よテニスの王子様
に勝て！

ディア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、青春学園テニス部にもう一人の二年生レギュラーがいたら…どうなつっていた
だろうか…？そんな物語。

注意！

この作品は作者の気まぐれで書いた作品です！

クロス要素が多いに含まれているので注意してください！
出来れば感想よろしくお願ひします！！

第4話
第3話
第2話
第1話

目

次

21 13 5 1

第1話

青春学園……テニス部が強く関東大会でもかなりの成績を残している学校だ。去年のメンバー大和を始め全国クラスの三年生達が引退し、戦力は不足になるかと思われた。

しかし去年一年生ながらにして当時部長だった大和を破った手塚、天才と言われる不二周助、そして他校で博士とまで言われる乾が二年生を率いており新一年生達を迎えることが出来た。

その新入生の中でも特に目立つ三人がテニス部に入部してきた。

1人目は桃城武。高いジャンプ力を生み出すバネを生かしたパワータイプのテニスプレイヤーである。

2人目は海堂薫。スネイクと言われる曲がる球を打ち、相手を走らせて相手のスタミナを奪うテニスプレイヤーである。

3人目は古賀大地。前の2人とは違いやや小柄な方だが肩の力が異常に発達しておりサーブの速さは国内では敵なしと言われる。またボレーも得意でボレー戦で打ち負けることはない典型的なサーブ＆ボレーのテニスプレイヤーである。

今回のお話は3人目のお話。

3月14日午前5時前。2人の男が上り坂をランニングをしていた。1人は古賀大地だ。

大地は九州の小学校を卒業して東京の青春学園に入学することになつていて。しかし父親や母親は海外に行くことになつてしまい、東京には住めなかつた為に大地の伯父にあたる人物に頼ることにした。

そして昨日……つまり3月13日に東京に着いて大地の伯父の家に居候し始めた。「大地、ペースが落ちているぞ!」

ハリネズミのような髪型をした中年がそう言つて大地の頭を叩く。

「痛つ! 伯父さんやめてくださいよ!」

そう言つて大地はペースを上げる。

「だつたらペース落とさず走れ!」

大地の伯父は厳しく、そう言い放つた。

「ぬおおおおつ!」

そして最後に2人は坂を登りきり、そのままUターンをし坂を下つた。つまりこれからランニングして帰るということだ。

「馬鹿野郎、ペースが早い! 少し落とせ!」

大地の伯父はさつきとは真逆のことを言つて大地のペースを落とすように命じた。

「えっ!? どうして…?!」

大地はそれに納得がいかなかつた。スタミナを少しでもつけるためにはスピードをつけて走つた方が良いと考えているからだ。

「坂の下りはペースを上げるよりもブレーキをかけて下る方がスタミナを奪う。スタミナを少しでもつけるためにはそつちの方が良いんだよ!」

大地の伯父の言う通り、下りでスピード出すよりもブレーキをかけて下る方がスタミナを消費する：

「わかりました」

大地はそれに従い、ゆっくりと坂を下つた。すると足の疲れを感じるようになつて坂を下り終えると

「遅いぞ！ もっと速く走れ！」

などと言つて大地の頭を叩いた。

大地達がランニングを終えると着いたのはボクシングジムだつた。

「よし！ 早朝ランニングが終わつたから次のメニューをこなすぞ！」

そう言つて大地の伯父がボクシングジムに入つて行つた。このジムの会長の名前は古賀大志。大地の伯父の名前である。

大地の伯父こと古賀大志はボクシングをやつていたがテニスプレイヤーだつた。高校生の時にテニスに出会い、僅か一月で自分のテニススタイルを確立させてシングルス九州N.O. 1の相手にも勝つたという経歴があつた。しかしほくシングルの夢を諦めた訳ではなく、むしろ高校のテニス部をボクシング部に変える程ボクシングが好きだつたので高校を出た後はしっかりとボクシングをやつてプロとなりチャンピオンとなつた。世界まであと一步及ばず引退し、東京でボクシングジムを作り現在では名ボクシングコーチとして知られている。

「何やつている？・ とつと入れ」

大地は大志にそう言わるとボクシングジムに入つて行つた。
これが古賀大地の東京の日常の始まりだつた。

第2話

「それじゃ、ミット打ちだ」

大志はミットを構え、大地にそういう放つ。

「伯父さん、これとテニス何の関係があるんですか？」

大地は大志とは違い小学生からテニスをやつており、実力も備わっている。

「パワーと対応力を鍛えるんだよ。お前は俺に似てパワーを生かすことも出来るし、対

応力があればテニスにも応用出来る。分かつたらやれ！」

大志はそう言つて右手に嵌めたミットを前に出す。

「はあつ！」

乾いた音がジムの中に響き、大地はその音を聞いて快感を覚える。

「よしいいパンチだ！ ほら次行くぞ！」

大志が左手に嵌めたミットを前に出す。

「……」

大地はそれから黙々とやるようになり、5回目になると大志が逆の手で大地を殴りに行つた。

「うわっ！ 危な！」

大地はそれを避けて抗議しようとするが…大志が口を開いた。

「対応力も鍛えるんだからこういうことは予測しておけ！ ほら次だ！」

時折、大地は大志のミット殴りを避けながらミット打ちを続けた。

「そこまで！」

それから10分程経ち、大地は汗を滲のように流し息もかなり乱れていた。

「はあーつ……ぜえーつ……」

大地は深呼吸を行い息を整えた。

「それじゃ飯だ。しつかり食つておけ！」

大志はそういうつて朝食の支度をし始めた…ボクサーならば自分の栄養管理をしなくてはならないのでどんなものを摂取するか考えなければならない。それを考えながら時間を過ごすのは面倒なので大志は料理をし始めるようになつたのだ。

そして2人は朝食を食べ終え一時間後…大志は大地に壁を背にするように指示して自身は大量にテニスボールが入つたカゴを5箱持つてきた。

「今度はこのテニスボールを素手で掴め」

大志はそう言つてトレーニングの説明を始めた。

「この練習方法は反射神経や下半身を鍛えるトレーニングだ。掴んだボールは向こうの

ネットに投げろ：行くぞ」

そう言つて大志は大地の右手方向に出す。

「はっ！」

大地はそれを掴み、ネットに投げた。

「……」

それから大志は無言で100球投げた…すると大地はすでに息切れしていた。

「伯父さんもう限界です……」

大地が弱気なセリフを吐くと大志は真顔になる。

「根性で粘れ！ 諦めたら自分の努力を裏切ることになるんだぞ！」

「くつ……!!」

苦しみの表情を出しながらも大地は粘りつつボールを掴んでは投げ、掴んでは投げ、

その繰り返しを250球まで粘る

「くそ…諦めてたまるか…！」

そして大地はついにぶつ倒れ気絶した。

「250球まで粘ったか…始めてにしちゃ大したものだな。」

流石の大志と言えどもこの量をこなすのは無理だと思つたくらいで本来の目的は反射神経や下半身強化でもない。

「お前の根性見せてもらつたぞ」
そう根性だ。接戦した時に重要なのは苦しんだ時の足掻き。つまり根性が重要だと
されている。

「う…」

大地に水がかけられ、大地は目覚める。

「起きたか。10分間休憩にするが身体はほぐしておけよ」
「はい。」

なお現在はまだ8時である。特訓の時間はまだまだ長い…

大地は身体をほぐす為にゆっくりと柔軟体操を行つた。柔軟体操はゆっくりと行うことで身体はほぐれるし、身体も適切なくらいに温まる。

冷えた身体で運動すると怪我をする危険があるので大地はこの方法を覚えていた。

そして次に使う道具はボクシンググローブとヘッドに、ボクシングの指導書の本だつた。

「え…？」

大地はそれを渡されて顔が引きつる…何故テニスの道具でないのか？ 等様々な

疑問が大地の頭を巡る。

「スパーリングを行うぞ」

大志はスパーゲング：つまりボクシングの実戦練習を行うと言っているのだ。

「伯父さん！　スパーゲングはちょっと問題ありませんか？！」

「まあ聞け……スパーゲングと言つても3分間の間にお前が俺に一発当てるだけだ。もちろん俺の攻撃を避けてな。これはスポーツの世界で攻撃的なスタイルを身につける方法だ。だから全力で攻撃してこい！」

大志はそう言つてボクシンググローブのみをつけた。

「伯父さん。歳をとつているのに俺のパンチ受けても大丈夫なんですか？」

「何、構わねえよ。どうせ当てることすら出来ねえんだからな。それにお前のヘナチヨコパンチを受けてもなんともない」

その言葉に大地はキレた。

「本当にいいんですね……？」

低い声で大地はそう言つてヘッドを被つた。

「準備は終わつたし、とつとと来やがれ」

大志がそう言つた瞬間、大地は一瞬で大志に詰め寄る。

「甘え！」

逆にパンチを貰つてしまい、大地は少しヨレる。

「ぼけつとすんな！」

大志はパンチを連打して大地を殴る。

「くつ……」

大地は先ほどのパンチを貰つて上手くガードした。

「防御しているだけじゃダメだ！ 攻撃もしろ！ 攻撃しなきやお前の勝ちにはならねえんだ！」

大志はそう言つて防御を崩し、頭にジャブを一発入れた。

「がつ……っ！！」

大地は頭に一発入れられてしまいダウンした。

「いいか……大地。お前に足りないのは基本だ。基本であるジャブを出さずに右ストレートなんか出したらそりやカウンターされる。テニスも一緒だ。ジャブから始めろ」大志は大地にそう言つてロープに寄りかかり……カウントを始めた。

「1、2……」

そして2の段階で大地は体勢を整えた。

「大地……さつき言つたことを実戦してみろ！」

大地はそう言わるとジャブを繰り返した。

「そうだ、相手に隙を与えるな！ 相手のミスを待つんじゃねえ、作るんだ！ テニスもボクシングも攻撃こそが最大の防御だ！」

そして大志は避け続けると笑みを浮かべ指導する。

「余程のことがない限り基本がいかに上手いかでそいつの強さが決まる。俺のように圧倒的に強い場合は基本を使わずとも勝てるから注意が必要だから気をつけな」

大志は強引にジャブを振り切り、右ストレートを放ち、大地を気絶させた。

「初めてにしちゃ上出来だつたぞ」

大志は大地の肩を担いでリングから降り：横にさせた。

「ぐつ……！」

大地が起きたのはそれから数分後で周りには誰もいなかつた。

「むちやくちややるな…伯父さんは」

大地はそう言つて起き上がりと紙を見つけそこにはメモが書かれていた。

「何々……？『買い物に出かける。もしジム関係で困つたら連絡しろ。電話番号は（以下省略）』……身体だけは少し動かすか」

そう思つているとジムの外から誰かが入ってきた。

「あれ？ 古賀会長は？」

その男はバンダム級／フエザー級の成人男性にしてはやや小柄な体格の男だつた。

「古賀大志会長なら買い物に出かけてますよ。」

「古賀会長の関係者か？」

「会長の甥にあたる古賀大地と言います。両親は海外に行つており伯父さんにお世話をなっています。」

大地は偽りなく男性にそう告げ、頭を下げる。

「そう紹介されちゃ仕方ねえな……俺の名前は星野和也。スーパーバンダム級のランカーだ。よろしく」

「星野さん。よろしく」

そう言つて二人は握手した。

しばらくすると大志が帰つてきた。

「帰つたぞ！」

そう言つてジムのドアを開くと大地と和也は話し合つていたが星野が大志に近づいてきた。

「古賀会長、聞いてないぜ。甥っ子が来るなんてな」

「ちよつとしたサプライズだ。ジムいる奴らの驚く顔が見たくてな」

そう言つて大志は悪い顔になる。

「全く……相変わらずだな。会長」

星野は苦笑いして呆れた声をだした。

第3話

「古賀一試合やろうぜ！」

テニス部に入つて早々、大地は同じ一年であるツンツン頭の桃城にテニスで勝負を挑まれた。

「残念だが断らせてもらう。」

「ああ!? 何でだ!?」

「今ここで勝負しろってのは無理だ。先輩達や竜崎先生に大目玉食らう。」

「う…そりやそうだけどよ。」

「そうなればレギュラーにも選ばれなくなつてもつと強い奴と戦えなくなるし、俺としてもそれはなりたくはねえんだよ。」

大地は静かに語るように桃城に言い聞かせると桃城は諦めた。

「ちつ…仕方無えな。それじや海棠、試合やろうぜ！」

「話を聞いていたのかお前は!?」

「どこまでいってもフリーダムな桃城に大地とバンダナの海棠がツッコミを入れた。

「つたく…バカはこれだから困るぜ。」

海堂はツツコミを入れて呟く。悪口故に桃城の耳に届き、桃城はつかみかかった。

「何だとコラ?!」

「バカだからバカつて言つてんだろうが?!」「2人ともよせ。お互いに気持ちは分からなくないがここで喧嘩したところでテニスができなくなるだけだぞ。」

大地が2人を抑えると2人とも手を離してブスツとした顔になつた。

「けつ！」

2人の険悪な雰囲気に大地は頭を抱える。そして閃いた。

「そうだ。明日確か2人ともオフだろ？いいテニスコート知つているから明日そこで試

合やろうぜ。な？」

「面白え。そこで決着つけようぜ。海堂。」「上等じやねえか……」

「あれ？ どうしてこうなつた？」

大地は2人を仲良くさせようとすると失敗に終わつた。

（翌日）

大地は携帯でテニスコートの場所を教え、桃城と海堂がラケットを持って対峙してい
た。

「入部した当初からこうやつて対峙するとずつと思つてたぜ……海堂。」

「それはこつちの台詞だ。」

「それじや試合をするから桃城、トスをしろ。」

ちやつかり大地は審判になり、2人の試合の進行を促していた。

「桃城対海堂、6ゲーム1セットマッチ、サービス海堂プレイ！」

トス…ラケットを回して表か裏かを当ててサービスかレシーブを選ぶ権利を得た海堂はサービスを選び、試合が始まつた。

「なかなか速いサーブじゃねえか！」

中学一年生にしては速いサーブだが平均よりも少し速い程度であり、桃城は難なく海堂の右側へと返す。

「ふん、言つてろ。」

「なんだ!?」
ゆらりと海堂の腕が動き…大振りで返すとボールが曲がり、カーブボールと成した。

そのカーブの切れの良さに桃城は一步も動けず、点を取られた。

「15—0！」

「今のはスネイク、俺の十八番だ。覚えておけ。」

海堂はそれだけ言うと「フシュー…」などと息を吐いて元の場所に戻つた。

「まぐれに決まつてら！もう一度やつて来やがれ！」

桃城はあんな切れのあるカーブボールをみるのは初めてであり、海堂の球をまぐれだと思つていた。

海堂がサーブを打つと海堂から見て右サイド、桃城から見て左サイドをガラ空きにして待機していた。

「ほらよ！ 左がガラ空きだぜ！」

故に桃城は海堂の右側へと打つた。だがそれこそが海堂の罠とも気づかない。

「スネイク！」

海堂は再びスネイクを放ち、桃城から点を奪つた。

「1—0、海堂リード！ コートチエンジ！」

その後、桃城は海堂にスネイクに翻弄されてゲームを落としてしまつた。

「やるじやねえの。んじやまあ俺も十八番を出すかね。」

ドズッ！

桃城はボールを頭上に上げ、弾丸のようなサーブを放つた。中学一年生でこれだけ強烈なサーブを放てるのは稀で、桃城のパワーが如何に優れているかよくわかる。

「うつ？！」

海堂はそれを返そうとするものの桃城の強烈なサーブに押されてしまいネットに

引っかかり、桃城に点を奪われた。

「15—0」

「へへっ！ 悪いな。これが俺の弾丸サーブだ。」

「上等だ。」

海堂は桃城の強烈なサーブを攻略しようと言わんばかりに燃えていた。
「それじやもう一丁行くぜ！」

ドズツ！

桃城の強烈なサーブが入り、海堂はそれを返そうとしてロブを上げた。これこそが海堂の作戦だ。真正面から桃城のサーブを返すよりもベクトルを変えて返す方が力を入れずに済む上、桃城はネットに詰め寄ることも出来ない。しかし、この作戦は失敗だつた。

「はあああつ！」

桃城は大ジャンプをしてそのロブをスマッシュで決めた。

「どーん☆」

桃城は海堂に指差し、ドヤ顔を決めた。

「30—0。桃城、今のはダンクスマッシュか？」

大地は思わず桃城に尋ねた。

「おうよ。あれこそが俺の十八番ダンクスマッシュ。」

ダンクスマッシュとは通常では届かないロブをスマッシュで決めるスマッシュでジャンプ力が相当なれば出来ないので習得難易度も必然的に高くなる。その分威力は間違いなくトップクラスの威力を持つだろう。バスケのダンクシートを連想させるようなスマッシュなのでその名前がつけられた。

「まさかお前がダンクスマッシュを使えるとは思わなかつた…さあ試合再開だ。大地は試合を再開させ、2人は元の場所へと戻つた。

「それじゃ行くぜ！」

桃城の弾丸サーブとダンクスマッシュのおかげで桃城が海堂に追いつき、海堂はスネイクで桃城からリードし…と言つたように互いにサービスゲームの取り合いが続き、タブレーキ（互いに6ゲームをとつた場合発動するルール）となり、海堂と桃城が互いに5ポイントを取つていた。

海堂がサーブをして桃城がレスライブを返すと海堂はすかさずスネイクを放ち、決まりに見えた…

「ウオオオオッ！」

ポーン…

桃城が海堂のスネイクに追いつき、ネットを越え…桃城に点が入つた。

「5—6！桃城リード！」

「スネイク、もう恐るるに足らず……なんてな。」

桃城が海堂をリードし、海堂は自分の切り札が通用しなくなつたことで精神的に追い詰められた。

「糞……！」

それ故に海堂は頭を抱える。このままでは桃城に負ける。ではあの弾丸サーブをどうやつて返すか…その思考に潜り込む。

「これでラストだ！」

桃城は弾丸サーブを打ち、海堂を襲う。その本人はと言うと

「ここ」で諦める訳には行かねえんだよおおおっ！」

海堂は桃城のサーブを真正面から打ち返した。海堂が桃城のサーブを真正面から打ち返せたのは理由がある。桃城はスタミナ切れによつてパワーが減つていた。それも先ほど海堂のスネイクを返すために全力で追つていたのだから尚更だった。

「アウト！」

しかし、海堂もスタミナ切れをしているのも事実だ。桃城のようにパワー・タイプでないでのパワーは然程変わらないがその分コントロールやスネイクの切れが甘くなつていた。

「ゲームセット！ 7—6、勝者桃城！」

「次は負けねえ…」

「俺だって負けねえよ。このまま勝ち続けてやる。」
2人の最初のライバル対決はこうして
幕を閉じた。

桃城と海堂がいなくなつた後、1人大地は茂みに向かつていた。

「何やつているんですか？ 乾先輩。」

大地は試合の前から視線を感じ、その元をテニスとボクシングの勘で見つけ監視していた。観察していくうちにそれが長身メガネの男：乾だとわかつた。
「やあ古賀。見ての通りデータを集めていたんだよ。」

「データを集めていたつて…あの2人の？」

「まあな。例えどんなに些細なものでも俺は調べつくす。それが俺のテニスだ。」

乾はそう語るとテニスラケットとボールを取り出し、口を開けた。

「ところで古賀、俺と試合やらないか？」

乾はそう言つてテニスコートに移動した。

第4話

「（くそつ、あのデータマンめ……）」

大地は目の前にいる乾を睨み、忌々しくボールをトスしてサーブした。

「センターに来る確率100%」

乾はそれを難なく返し大地のいない所に返球し、リターンエースした。

「これで0—40だ。言つただろう。古賀のデータは取り終わつたから勝ち目はない」

「確かに流れは俺の方が悪いでしようが、リードしてんのは俺の方ですよ。勝ち目なら十分にありますよ乾先輩」

「それもそうだな。今の状況は4—5。つまり俺が後一ゲーム落としたら負けだがここでブレイクしたら後一ゲームで俺の勝ちになる」

「なんで説明口調なんですか？」乾先輩

「今の状況を口で語ることで冷静になれる。状況を整理してプレッシャーにかかる場合もあるがこれだけ優勢な状況で負ける要素なんかないからな。データは嘘をつかない」「……なら、そのデータをぶつ壊してやる！」

「見せて貰おうか古賀」

大地が下がると爪を噛りながら思考する。

「（とはいえたまつたな。あのデータテニスを破るにはどうすればいい？ 打つところに乾先輩がいる以上、逆をつけない。そもそもどうやって乾先輩はその場所に移動しているんだ？）」

そんな疑問を大地の頭の中で巡らせると一つ閃いた。

「（ラケットの位置で移動しているのか？ だとしたら試してみる価値がある）」
そして大地が決意すると乾に背を向けた。

「な……なんだ？」

「いきますよ。乾先輩」

天高くトスを上げ、大地が乾に背を向けたまま空を飛んだ。

「ら、ラケットが見えない！」

そう乾の視点から見てラケットが見えない状況を大地は作り出した。それは皮肉にも伯父、大志が産み出したサーブの一つでもあった。

そしてラケットが見えた時、ボールは既にサービスエリアでバウンドして乾の後ろにあつた。

「これで15—40……ですよね。乾先輩」

「そ、そうだな」

「それじゃもう一丁いきます！」

再び大地がラケットを隠すように乾に背を向け、空を飛ぶ。

「（ラケットを見てからじや遅い！ ベースラインで待ち構えるしかない！）」

そして乾がベースラインまで下がる。しかしボールは乾の視界から消えていた。

「（ば、馬鹿な！ ボールが消えるなんてそんなことがあるのか!?）」

乾は取り乱し、ボールを探す。するとボールがバウンドし金網に引っかかる音が響いた。

「……今のはサーブはミスか古賀？」

「あれ？ 乾先輩見逃していたんですか？ 入つてましたよアレ」

「何つ!?」

乾が慌ててラインを調べると確かにボールの跡が新しく刻まれ、大地のサーブが入つていたことを証明していた。

「（信じられん……俺が見逃すとは）」

「さあこれでようやく追い詰めましたよ。乾先輩」

「くつ……ならばそのサーブのデータをとるまで！」

乾がラケットを構え、大地の腰や上半身の捻りを見る。これまで乾は大地の腕を見てサーブのコースを予想していた。それは正しくサーブのコースを決めるのは腕の動き

によつて決まる。しかし今回はそれが出来ない。大地のラケットの動きは大地の身体によつて見れなくなつてゐるからだ。

「（ここだ！）

乾がそれを見切り、センターへと移動するその場所には乾の望むボールが真つ直ぐにきた。

「よし捕らえ……っ！」

乾がラケットを振るうもボールはそこにはなく、ラケットを空振る。そして肝心のボールは右端の方にあつた。

「理屈じゃない！」

乾がそう叫び、啞然とするその姿はまさしく追い詰められた者の顔だつた。

「乾先輩、これでデュースですね」

「……そのようだな」

「ほーう、どうやらあのサーブを自力で覚えたみたいだな。大地」

大地や乾とは別の男性の声がコートに響く。

「伯父さん、どうしてここに？」

その男の正体は大地の伯父の大志だつた。

「ん？ まあ暇潰しつて奴だよ。それよりもポイントはどうなつてゐる？」

「俺が5—4で今デュースに入ったところです」

「ふーん。つてことはあと2ポイントか。それじゃ最後に審判やらせてもらうぜ」

大志がテニスコートに無理やり入り審判席につく。

「さあレシーバ、とつとと構えろ」

「あつ、はい」

それまで呆然としていた乾が乾いた返事をしてラケットを構える。

「プレイつ！」

そして古賀大志を審判にして再びテニスが再開された。

「（ふーん、こうしてみてみると結構改良出来る余地が残ってやがるな。遠目で見たときは俺そつくりだつたが近くで見てみると俺とは別のサーブだ）」

大志は大地のサーブを見て、現役の頃のサーブを見比べ改良の余地があることを見極める。そしてまたもやサーブが入りノータッチエースを五連続で決めた。

「アドバンティージ、大地！」

ついに大地はマツチポイントまで追い詰めた。

「（中坊共にあのサーブは取れねえよ。アレを取れたのは高校生でも全国クラスの連中だけだ）」

そして古賀の言うとおり乾はそのサーブに触れることなく試合が終わつた。

「ゲームセット！ 6—4、大地！」

（）

「流石だな古賀。今度はそうはいかないぞ。あのサーブを徹底的に研究して俺が勝つてやる」

「こつちだつて負けませんよ。あのサーブがあつたとはいえ課題はまだまだありますから」

「二人が握手すると大志は満足げにそれを見届け、その場から黙つて立ち去つた。

「じゃあ、掃除して」

「こらー！ 何をやつとるんじや！」

大地がそう告げた瞬間、それまでの空氣をぶち壊すような竜崎顧問の声が響いた。

「あ……」

「まつたくこんなに散らかしてお前達にはテニス部員としての云々かんぬん……」

竜崎顧問の説教が始まり、うんざりしながら二人の思いは一つになつた

「（逃げたな……あの人）」

シンクロレベルで二人の意見が一致し、竜崎顧問の説教を延々と聞かされるはめになつた。